

曹參。怖ろしい鼠もあつたものだ。部下にはどの位ゐるのだね。

使者。一昨晚奴が自分の城に火を放つて城下を出た時には未だ八百騎位はゐたのです。それが昨日は半分に減り、今日あの長い藪を抜けて河べりに来た時にはもう僅か二十騎許りになつてゐました。

曹參。二十騎ではいくら項羽でももう諦めるより外ないだらう。

使者。處が奴は味方が豫ねて用意しておいた一艘の渡し船に乗つて河を渡るともうすつかりそれで落ちのびる事が出来たものと思つて大喜びに喜び、その渡しの船頭にかう云つた相です。俺は項羽だ。お前は項羽の難を助けたのだ。それで俺はお前の一族が永久の光榮にあづかるやうに一年後にはお前に會稽の太守の地位を授けてやる事を誓ふぞ。とかう云つて其誓ひの印に例の烏騮を其船頭に呉れてやつた相です。

張良。は、會稽の太守の死に始まつた奴の運命が圓らずも同役の者に仇を取られると云ふ譯だな。

使者。流石にあの名馬と別れる時は奴も涙ぐんでゐたと其船頭が云つてゐましたよ。

曹參。(盃を)とにかく江東へ行く道は此道一本しかないのだから奴が逃げて来ればどうしても此處へ来なければなりません。後ろからは漢王と韓信とが四十萬の大兵を合はせて追ひつめて来る。其處で此方には貴方と私とが待ち伏せして最後のとどめをさして呉れるのです。到る處に斥候が出てゐます。之で仕損ひがあつたらそれだけで天下を項羽に戻してやつても然るべきですな。

張良。奴は未だ前途を夢みて江東へ行きついたら、江東へ行きさへしたら、と思つてゐるのだ。だがもうそろ／＼奴が儼めな姿になつて来る時分だ。皆々、用意はい、だらうな。

部下。(おづ／＼)何時でも。

使者。(急ぎ登場)項羽はもう其處迄やつて来ました。獅子奮迅とはあの事です。全で雷神が氣違ひになつて怒り哮つてゐるやうです。

部下。(顔色を變へ)やあ。隠れる。隠れる。(去る)

張良。部下は未だ少しはゐるのか。

使者。もうあの桓楚一人きりです。二人とも血みどろになつてゐます。針鼠のやうに矢をさゝれて項羽は倒れては起き、倒れては起き上り、左の手一本であの夏侯嬰を眞二つに斬り倒して了ひました。逆立つた頭の毛を振り亂して走つて来る様子と云つたら逆も物凄くて人間とは思へません。

張良。いくら強くても力は智慧には叶はない。天命には叶はない。皆、おしけるな！どんな事があつても此處で奴の首を取らなくてはならない。

使者。あゝもう彼處へやつて来ました。もう項羽一人になつてゐます。(逃げ去る)

張良、呼笛を吹く。間の聲上がる。

張良。よし、此處迄来たら俺が戦つてやる。なんぼ何でもあれ程力を失つてゐる項羽に打つてかゝる

勇気がないと云はれては俺も恥さらしだ。

曹參。いや、貴方一人では危ない。私が助けます。貴方が前から戦つてゐる間に私が後ろから刺してやります。(旁白)君一人に其功名を得させて堪るものか。

二人、劍を抜きて右手に去る。鼓を鳴らす音、ワイ／＼云ふ間の聲。劍戟の音。部下の兵大勢、二人を助けに左手より走りて舞臺を投げ、右手に行く。やがて「萬歳！」の聲聞こゆ。
張良、血に染み、右手に項羽の首を持ち、左手に劍を振りて曹參と共に戻り来る。
部下の兵、項羽の體を引きずつて来る。曹參それを奪ひ取る。昔、大變な珍らしい物を見るやうに「ドレドレ」と云ひながら押しつけつゝ、怖／＼項羽の首と體とを見に来る。風風。

部下の者一。とう／＼くたばりましたね。

曹參。いや、どうも恐ろしい奴だ。私が横から脇腹をズブリとやると奴は「此首は貴様等が取つたのではない。俺が呉れてやるのだ」と云つて左の手で自分の首を斬り落したではありませんか。そして私の劍は全で岩の隙間に突込んだ杖のやうにボキリと折れて了ひました。

部下の者二。さうして未だ暫くは首のない儘で突つ立つてゐましたぜ。

張良。飽く迄も項羽らしい死に方をした。其點では奴も満足だらう。さあ、漢王が此首を御覽になる迄は丁重におかなければならぬ。

豹の皮衣を地に敷き其上に項羽の屍體を置き、蓋の上にその首をのせ置く。

曹參。何しろ此人の頭張り強い執着には驚きます。最後の一人になつて自分の脇腹に私の劍でとどめが刺され、息の根が絶えたと云ふ間際迄あはよく助かつて又運命を盛り返へさうと云ふ望みを失はないのですからね。

部下の者一。本當に大抵の者なら昨日の中にもう降参して了ふか、諦めて自害して了ふかすべき處です。否それどころかあの城下で、虞美人が果てた時にも自分も一緒に咽喉を刺して倒れる位が落ちです。それを此項羽と來たらたつた今此處へ來てへたばかり盡す迄未だ駄目だとは思はなかつたのです。何と云つても流石は天下の霸王です。

部下の者二。あゝ、漢王が御着きになつた。

一同各々兜を脱ぎ、それを投劍の先きにて高く掲げ祝意を表しつゝ、祝儀を唱へ、劉邦を迎ふ。
劉邦は舞臺以下の諸將を従へ赤き旗に團まれつゝ、歡呼の中に勇ましく登場。張良等出迎ふ。

劉邦。(項羽の屍體に近づきつゝ)とう／＼打ち取つたな。

張良。御覽の通りです。之で永年の争亂も一先づ一段落がつき、天下は漸く暗雲を除く事が出来ました。

韓信。之からは天日も人と共に喜んで中國の民の上に安らかな微笑をもらすではありません。劉邦。貴い屍だ。虞美人の遺骨と一緒にして丁重に葬るがよい。虞美人の遺骨は何處にあるのぢや。



蕭何。何しろ城と一緒に灰になつて了つたので遺骨と云ふものは見當りません。處が茲に不思議な事もあればあるもので、あの虞美人の焼け死んだ城跡に昨日から俄かに見慣れない美しい草花が咲いてゐるのです。

劉邦。河。焼け跡の灰の上に花が咲く。

蕭何。誰でもそれを自分の眼で見ない中は嘘だと思はないのが嘘です。處が現に土地の娘などがもう其花を虞美人草などゝ名付けて、てんでに響の代りに髪に挿したり、胸を飾つたりして居るのを此眼が見たのでございます。

張良。ふむ屹度又こじつけの好きな迷信的な愚民共が根も葉もない偶然の現象に詩的な因縁をくつつけたのかも知れません。

劉邦。いや、俺はそれを別に不思議とは思はない。世は不思議許りだ。俺が今迄諸君の力で此危い運命をもちこたへ、かうして最後の敵手の首を打ち取つて眺める者が項羽である代りに俺となつたと云ふ事がどうして不思議でないかと云へやう。丁度よい。此男らしい屍を其虞美人草とやらの茂みの中に埋めるがよい。それがせめてもの供養ぢや。(項羽の首をとつてそれを眺め) わが友、わが恩人、君は遂々こんな姿になつたのか。君はそれが私にとつてどの位大きな損失であるかを知らまいと云つても私を信じないだらう。君は私を狡猾な、嘘吐きの義理知らずだと思ふだらう。併し私は君を打ち倒さなければ生きられない運命を持つてゐたのだ。君は英雄らしく倒れた。併し私の内の君は永久に私を滅める鬼として生き残るだらう。(其口に接吻し) 祝願されてあれ、わが友の靈よ！かうして今君の首を打ち取つて見ると私は張りつめてゐた宿年の力が一時に抜けるやうな気がする。私は自分の禍を除いた今、自分の何よりの寶を失つたやうな寂寥を感じる。私は今更のやうに私の畢生の敵であり、運命の防害者であり、生命の競争者であつた君が誰より私の生涯の缺くべからざる知己であり、道づれであり、恩師であつた事を感じる。君は私の喜びを知つても其淋しさを知るまい。私は君に次いで覺束なくも天下の主となるべき自分の天命の前に畏れもいじけはしないだらう。私は此盃を單に偶然の運から與へられたものでなく、必然の力によつて招き寄せた物として受け度い。だが私に其盃を受けるべき資格を授けて呉れた者は君だ。私は天が私を眞に鍛へる爲めに君を授けて呉れた事を感じる。君がゐて私を打ち碎き、私を教へる事がなかつたならば私は天子にならうとも君のやうに果てなければならなかつたらう。吾々は君によつて力の力と果敢なさとを見知つた。しかし私の成すべき仕事は之からだ。願くは天下が久しく待ち焦がれてゐた之からの平和の日の事業の中に私は天意に叶ふ天子となり度い。そして萬民に歡びと平和とを齎し度い。今迄の凡てはその試練であつたのだ。かくて君の首を打ちとつた此大争亂の終結と共に私は此血腥い禍の劍を此最後の戦場に祭る。(自ら劍を取りはづして烏江に投げ込む。)

月、河の向ふより赫々と輝き昇る。劉邦、それの方に向つて手を掲しつゝ斬る。



大正十六年十月一日初版發行
 大正十一年五月三十日改版印刷
 大正十一年六月五日改版發行

(定價金四圓)

◀ 邦 國 の 羽 項 ▶

發行所

新潮社

電話番町 〇八八八
 〇〇〇九八七
 番番番

東京市牛込區矢來町三番地

著者 長 與 善 郎
 (挿 畫) 河 野 通 勢
 發行者 佐 藤 義 亮

印刷所

東京市小石川 西江戸川町
 電話小石川五九二番

富士印刷株式會社
 印刷者 佐々木俊一

長 與 善 郎 著 作

■ 生 活 の 花

(小説) 哀れな少女、以下五篇〇(小品) 死せる一賊、以下三篇〇
 (脚本) 教師の家にて〇(感想) 運命について、外九篇〇對話、感
 想詩〇著者自傳等

四六版特製 ◆ 價壹圓五拾錢
 三百八十頁 送料拾貳錢

■ 賴

五幕四場より成れる長篇戯曲にして、別に『羽衣』の一篇を附録
 とせり。

朝

四六版特製 ◆ 定價壹圓
 二百頁 郵送料八錢

■ 結 婚 の 前

結婚の前〇Yの幻影〇生活の一片〇亡き姉に〇里、以上の小説
 五篇を收む。

特製半紙 ◆ 定價五拾錢
 百六十頁 郵送料四錢

□□□ 新潮社出版 □□□

番二四七一(東京)發編

三十九作家の一幕物選集成る

現代戯曲大観

總布表紙・天金、最上製・紙數一千頁・定價四圓五拾錢、送料拾八錢

我が劇文壇の權威たる下記卅九作家の最も自信ある一幕物を集めたもの。光彩陸離たる現下の戯曲界を記す可きエボグの一大出版にして劇作家協会の編也。

寄稿三十三家
 秋田雨雀 近藤經一 能島武文 鈴木善太郎
 灰野庄平 久保田万太郎 額田六福 鈴木泉三郎
 長谷川時雨 久米正雄 岡田八千代 田村西津
 林和 楠山正雄 岡本綺堂 田村純
 伊原青々園 武者小路實篤 大村嘉代子 田中
 池田大伍 長田秀雄 小山内薫 谷崎潤一郎
 伊藤松雄 仲木貞一 里見淳 山本有三
 川村花菱 中村吉藏 佐藤紅綠 山崎紫紅
 菊池寛 中島俊雄 瀬戸英一 吉井勇
 北尾龜男 長與善郎 島村民藏 (A・B・C順)

現代脚本叢書

- 第一編 未能力者の仲間 (附) 成日の出来事 武者小路實篤氏著
- 第二編 飢 渴 (附) 大霧の夜死 長田秀雄氏著
- 第三編 法成寺物語 (附) 十五夜物語 谷崎潤一郎氏著
- 第四編 髑 髏 舞 (附) 小しんと馬馬 吉井勇氏著
- 第五編 阪崎出羽守 (附) 淫見處。穴。山本有三氏著
- 第六編 雨 空 (附) 四月盡。雪。久保田万太郎氏著
- 第七編 秦の始皇 (附) 西燕と遊女。灰野庄平氏著
- 第八編 七年の後 (附) 清盛と常盤。夜の一揚。其他。近藤經一氏著

■小 さ さ 世界 定價金貳圓 武者小路實篤氏著
 二つの心、或日の一休、わしし知らない、二十八歳の悪戯、罪なき罪、三和尙、悪夢、其他。

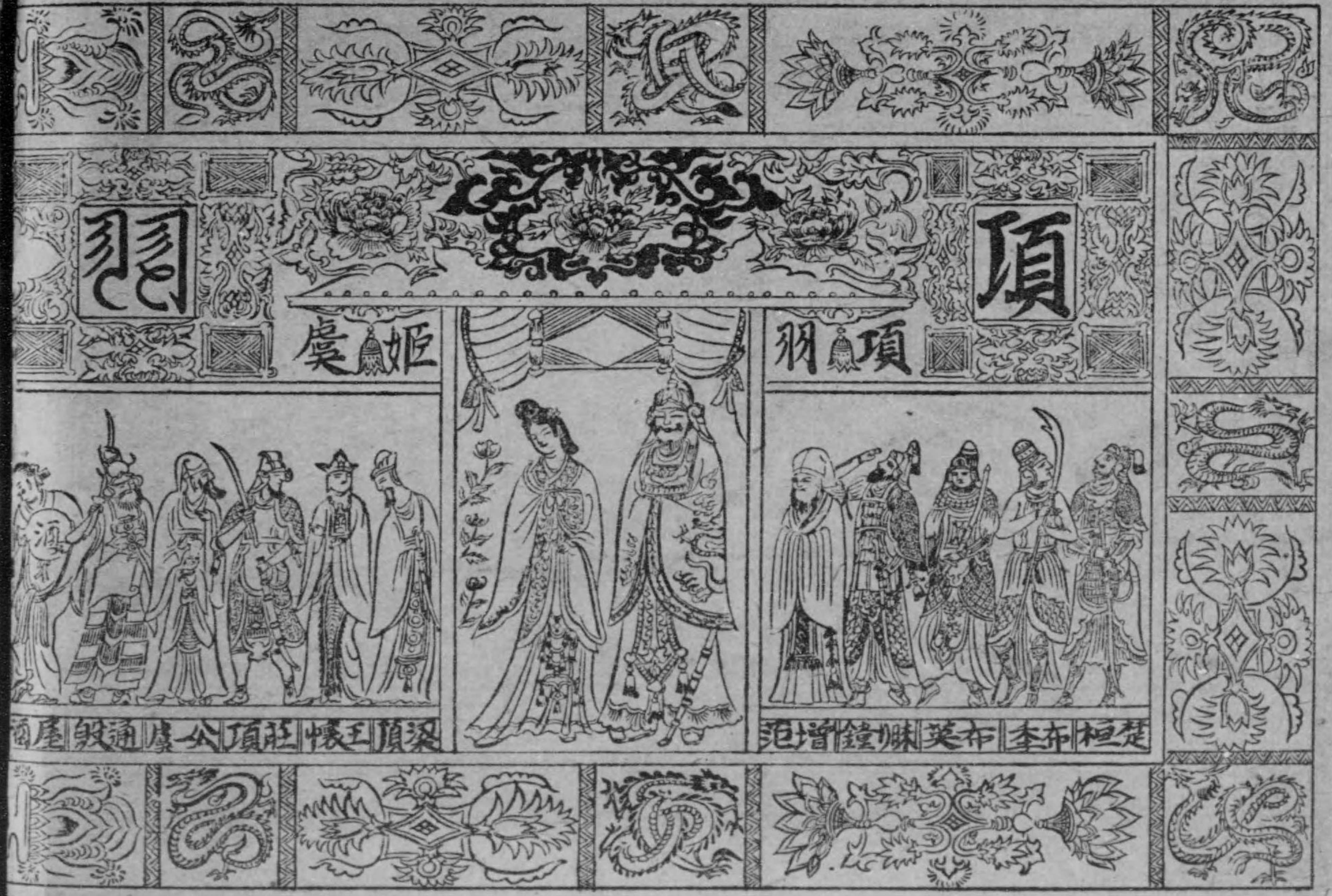
■玄宗と楊貴妃 定價九拾錢 近藤經一氏著
 郵送料六錢

■ルクレシヤ 價金四拾錢 近藤經一氏著
 郵送料八錢

別題「若くはしき人妻の死」

新 潮 社 出 版

各册二頁四十頁 ◆ 定價一圓 ◆ 送料一錢六錢



羽

項

虞姬

羽項



項梁 項王 懷王 項公 虞公 通 殷 屠

楚 桓 李 英 咄 鐘 增 范

終